

かくの如くにして九日目アルペンの頂上に達せり。眼下に展開せる千里の野に我將に武を用ひんと微笑せしハンニバルの胸中に、壓え難き或る物有りしならん。

而れども兵士等餘りの苦痛に疲れ、特に下るに路なき懸崖を見て今更の如くに懼怖し、士氣沮衷せんとせり。ハンニバル夷然として遙かなる一都城を指して曰く、「彼の城こそ羅馬府にあらずや、財寶すでに眼前にありて汝遠來の客を待てり、何ぞ自ら躊躇するぞ」、この言に勵まされし全軍再び氣をふるひて十有五日にして伊太利の野に達せし時、兵員二萬六千にすぎざりしなり。

ナポレオンの先輩マセナのナイスの軍門に埃太利軍になやまされ、喊聲雷の如くに押し寄せ、刻一刻身にせまる危険今や見通し得べからざる時に當り、彼はこの危急を救ふべく捷徑たるアルプスを越えんと企圖せり、兵士及び軍用品は嚴密に検査を行はれ軍隊は主將ナポレオンの意氣に感應しつゝ凜然として奮進せり。峨々たる絶壁の上霜の間より甲の最を燦めかしつゝ、一團の軍隊あらはれたり。鷲は叫喚して彼等の足下の岩間に飛び、獸は異様の光景に打たれて跳ね廻り、人跡絶えたる幽寂の所に忽ち來りし武勇なる軍隊を注視したりしならん、軍列の特に危険なる個所に來る時毎に、喇叭を吹奏して元氣を鼓舞せり、その響は氷と岩なる絶頂より反響して崇高なる音を立てしならん。何事にも注意深きナポレオンなりしかば一人の落伍もなく約十二哩の長列に些少の混亂をも惹き起す事もなく、僅々四日にして軍隊は美しき平野伊太利を進軍したりしなり。

要するに交通未開の時代に當り、而もこの大軍を擁してこの天險を突破したる事や世の驚異するところなり、ナポレオン彼のアルプスを評して、「此の如き宏壯にして而も遠大なる計畫たるや、人類の今だ曾て爲さざる處なり、而してこの計畫たるや實に秩序正しく實行せられたり」と。兎も角もこの偉業たる兩者ながら吾人史上に永久に光彩を添ふる偉大なる登山なり。

然れども吾人は以上の如く花々しからず、その目的を異にしその用を異にするが故にかゝる高峰を好まず、人に知られざる登山をなさざるべからず。若し生々潑潑の雄士兩三相携へ、田圃の間を徑て幽谿に入り、手に清泉を掬して苔石の上に踞せんか、松籟頻に琴音を弄して迎へ、泉聲幽に耳朶に來るべし更に上れば阪路漸くけはしく圭角峻々たり岩石磊落たり、既に頂上近きに到れば眼界忽ち開展して、一望涯際なく、遠近の群峯脚下に集り、田野亦綠色の布を敷けるに異ならず、河流の蜿蜒たる一條の銀線に似たり、その愉快、その眼識の發達や如何に、天地の如何に宏大に、天然の如何に壯大に、自然の如何に秀美なるかを知らん、亦同時に人界の如何に些少に、人力の如何に微弱に、俗界の如何に不潔なるかを了せん。是れによりて始めて自然界を知らんとし亦究めんとするの念愈々深切なるべし。

噫々青年の身体を鍛錬し、精神を修養するは實に峻嶽に登り高山を踏むの氣宇を馴致するに若くはなし、我が國は有名なる山國にして、國中到る所に秀山聳え佳山立てり、我が國や正に登山至適の國と云ふべし、茲に亦吾人學生に最好機會をあたふる避暑休暇あり、悠々たる閑これ最上の登山期なり。され

ば北窓の下に暑熱を啣ち、午睡を貪り、あたらし三句の好閑を碌々に貪らんよりは、寧ろ三寸の草鞋に三尺の輕笥を岩角に試み、心神を千仞の雲間に修養すべし。

將來益々興隆に向ふべき我が大日本帝國を雙肩に負ふべき元氣ある青年よ！ 希くば餘閑あらば出で、高岳を攀ぢよ。何を奮つてこの好時季を利用せざるや。(了)

朝 三 暮 四

四 甲 不 破 善 次

話の順序と致しまして朝三暮四の意味から考へて見ますと先づ莊子の齊物論にかう書いてあります、
何をか朝三と謂ふ、曰く、狙公茅を賦つに朝に三にして暮に四にせしと云ひたるに褒狙皆怒りたり、
然らば則ち朝に四にして暮に三にせんと言ひ換へたるに衆狙悦びたり、名實未だ虧けずして喜怒用を
なすも亦是に困る也云々

又列子黄帝編には尙一層精しくのつて居ますがその大意はこうであります、

宗に狙公と云ふものがありました、非常に狙を愛しまして狙を養ひ能く狙の意を解しも狙も又狙公の意を得て居りました、彼は家族の費用を儉約して迄狙の欲を充たして居りましたが俄かにその資に置しくなつたので止むを得ず狙の食物を制限せんとしましたが衆狙が自分に馴れなくなる事を恐れて之を

誑かさんとし「汝に茅を與ふるに朝三にして暮に四にしては如何」と云ひましたが衆狙は不足を告げて怒りました、そこで俄かに語を換へて「汝に茅を與ふるに朝に四にして暮に三にせば如何」と云ひましたすると衆狙は平伏して喜びました、智者が智を以て群愚を籠するは恰も狙公が智を以て褒狙を籠するのと同じく名實虧くる所なく必竟同一であります云々

これで朝三暮四の意味はお解りの事と思ひます、そこで此の朝三暮四に不平を稱へながら朝四暮三に満足した狙は果して愚でありませうか、朝三暮四と朝四暮三とが等しいとして居る狙公や、莊子列子は果して賢でありませうか、諸君は如何お孝へになりますか、私の考へでは狙公等よりも狙の方が理學思想に富んで居ると思ふのであります、莊子、列子は時間に對する觀念が無い爲に朝三暮四と朝四暮三とが等しく考へられ、時間を念頭に置いて居た狙はそれらを等しとは考へ無かつたのではありますまいか。

三と四との和と四と三との和が相等しい事は數學上動かすべからざる事ではありますが實際上にては決してそうではありません、物の順序と云ふ事は甚だ肝要な事でありまして時としては順序が最も大切な事もあります、諺にも六日の菖蒲、十日の菊とか盗人を捕へて繩なひ等と申しまして時間の重要な事が云つてあります。

生れて死ぬのと死んで生れるのとは順序が違ふだけですがその二者の間の意味の相違は非常なものであります、硫酸に水を加へると水に硫酸を加へるとは順序が違ふだけですが一方は容易に行はれま

すが一方は爆發を伴ふのであります、かくの如く物事の順序は必ず無視すべからざるものであります。

東北帝國大學の教授理學博士日下部四郎太先生のお話の中にあつた事でありませんが、先生がまだ中學校の先生をして居られた時の事であり、教育界の公理とでも云ひませうか、先生はあまり生徒には好かれぬものであります、その上數學の先生で寄宿舎の舎監ですから益々生徒に好かれなかつたのであります、その先生には食事の時に飯に汁をかけて食ふ癖がありました、或日の事生徒等は申し合はせまして食事の時一齊に汁に飯を入れて食ひました、そこで先生が早速その非禮を責められますと生徒は異口同音にかう答へました。

先日代數の時間に甲と乙との和は乙と甲との和に等しく甲及乙は何物である事をも得ると先生は言はれましたが今飯を甲、汁を乙としたならばその法則によつて先生の何時もなされる飯に汁をかけるのと今私らのした汁に飯を入れるのとは等しくは無いでせうか。

どかくの如く數學上の事をそのまゝ世事に當てはめやうとしたら必ず失敗が生ずるのであります、何故なら數學の方では順序と云ふ事を眼中において居ないからであります、代數の方では一人で十日働くのと、十人で一日働くのとは同じであるとして居ますが實際上では決してそうではありません、殊に美術品の製作などに於ては明かに之が分るのであります。

列子百世の孫に孺子と云ふものがありまして常に經世の任に擧げられて居まして父祖の學に通して居

りました、或時彼が或事を請負師に請負はせます時に豫定では起工の始めに參萬圓を竣功後に四萬圓を拂ふと云ふのでありましたが請負師の方ではそれでは請負ひませんがその仕事の始めに四萬圓を請取り落成後に參萬圓を請取る約束でその仕事を受けとりました、孺子以爲らく、此れ狙公の朝三暮四にして請負師の愚狙に類せりと、然し彼は果して賢でありませうか、もし始めに壹萬圓多く受け取つたならばその金は資金の働きをして大いに活躍する事になります、請負師は此處に着眼して居ましたが孺子は單に合せて七萬圓を彼に渡すのであると解釋して居たのであります、孺子の眼界は甚だ小さくて全く列子、莊子の爲にこんな思ひ違ひをさせられたのであります、狙の朝四暮三もこれと同じであります、もし朝三で暮に四であるならば一日中空腹を抱へねばなりません、朝四で暮に三であるならば暮の食で空腹であらうとも間も無寝に就くのであります、そうしたらその空腹は忘れる事が出来ず、そうしたら自己の仕事の能率に何の影響も與へぬ事になります、狙は此の點まで考を及ぼして居たのであります、故に狙は理學思想に富んで居たと云ふ事が出来るのであります。

こゝに一臺の飛行船があつて二個の推進器を据えて居ると致します、もしも第一の推進機のみを運轉する時には一時間に三哩第二の推進機のみの中には一時間に四哩の速力を出す事が出来兩者を同時に運轉する時には一時間に七哩の速力を出す事ができるとしまして今此飛行船が朝六時に第一の推進機を運轉し夕の六時に到つて更に第二の推進機も運轉せしめたとしたならばその最後に得た速力は一時間に七

哩であります、今又此飛行船が朝六時に、第二の推進機を運轉し夕の六時に到り更に第一の推進機も運轉せしめたとしたならば、その最後に得た速力は此の時も一時間に七哩であります、所が午後七時までの飛行時間に對するその航路の長さは前者は四十三哩、後者は五十五哩となるのであります、かくの如き場合に於きまして莊子、列子は最後に得た速力を比較して第一の場合と第二の場合とが等しいと考へ衆狙は航路の長さを考へて等しからずと思つて居ると見るべきであります、此れから考へましてもヤハリ狙の方が理學思想に富んで居るのであります。

この飛行船の推進機が動いて飛行船を前進せしめやうとする事を作用と云ひ、それによつて飛行船が速力を得たり位置を變化したりするのをその効果と云ひます、酒を飲んで美味しいと感じ又酔ふと云ふのは酒を飲む作用の効果であります、一つの作用の効果はいつも一つではありません、多くの場合二つ以上あります、食物を食ひうまいと感ずるのは第一の効果でその消化によつて體力を増進すると云ふのは第二の効果であります、而して第一の如きは一時的効果と云ひ第二の如きは耐久的效果と稱へます。

此處に質量Mの一物體があるとし之に一定の力Fを加へましたならば此の物體は運動を始めましてt秒後に力Fを加へるのを止めたとします、そうしたならば此の物體は毎秒FMと云ふ加速度を受けまゝ、而してt秒後の其の物體の速力はtFMであります、更にもt秒後その物體を留めたとしましたらその物體の運動の總距離は

$$\frac{1}{2} \times \frac{F}{M} \times t^2 + t \times \frac{Ft}{M}$$

となります、力Fが加はつてゐる間は次第にその速力を増しますが力Fが加はらなくなると同時にその速度は増さなくなりますがその物體が位置を變化する事は空氣の抵抗と摩擦が無かつたら永久に續く物であります、それで前者は一時的効果で後者は耐久的效果であります、此の世の中は競走場と同じでありますからして吾人が或作用を起す即ち努力すると同時に起るその効果をして大ならしめる必要があります、それには一時的効果を産む努力より耐久的效果を得る努力をせねばなりません、換言しましたらば此の生存競争の激しい社會に出て成功せんと思ふ人は少しの努力で大くの効果を得なければなりません、何人と雖も失敗を望む人はありませんから自分が百の努力をしたなら自分の相手も百の努力をして居るのであります、然るにその相手に打勝たんとしたら同じ努力でも多くの効果を修め得る方法によらねばなりません、社會の人々は誰でも努力して居ます、然るに成功者と失敗者とが區別できるのは畢竟その方法の善悪によるのではありますまいか、かの二年も三年も落第して後ヤット卒業する人と一度も落第せずに卒業する人との努力を比べて見ましたならばヤハリ前者の七年間の努力と後者の五年間の努力とは前者の方が大であるのであります、前者が後者よりも餘程多くの年月を費して漸く卒業したと云ふのは前者の努力法が悪かつた爲であります、此處にコップがあります、此のコップを平滑な面の上で位置を變化せんとしましたならばチョツと押しただけで此のコップは運動を始めて位置を變じます

が持上げて此のコップの位置を變化しやうとしましたならばその勞力は前の何倍でありませうか兎に角餘程、前よりも多くの勞力が必要でその功果は同であります、これによりまして何事をなすにもその方法が甚だ肝要なものである事は明かに分るのであります。

それで私等が勉強をしましてもその方法に多いに注意すべきであります、こゝに甲と云ふ生徒と乙と云ふ生徒がありまして同級であるとします、而して甲は常に所謂試験勉強をして居たとし乙は常に實力養成主義であつたとします、さうしたならば一年生の時にはその試験の成績は甲が優つて居るでありませう、何故なら一時的の勉強をした甲の功果はその一時は非常に大なるものでありますから、所が二年生になりますと乙は幾分は忘れて居ても一年生時代の力が残つて居ますが甲は最早なくなつて居るのであります、それで乙の勞力が餘程小なるにあらざれば乙は必ず甲に優つて居るのであります、今乙の一年生の時の智識は二年生の時には小數に倍となつて残るものとして入學の時から卒業の時迄の勞力と功果との比較表を作つて見ますと

	甲		乙	
甲級	努力	功果	努力	功果
1	A_1	a_1	B_1	b_1
2	A_2	a_2	B_2	b_2+rb_1

3	A_3	a_3	B_3	$b_3+rb_2+r^2b_1$
4	A_4	a_4	B_4	$b_4+rb_3+r^2b_2+r^3b_1$
5	A_5	a_5	B_5	$b_5+rb_4+r^2b_3+r^3b_2+r^4b_1$

となりませう、而してその和を比較して見ますと

甲の努力	$A_1+A_2+A_3+A_4+A_5$	乙の努力	$B_1+B_2+B_3+B_4+B_5$
功 果	$a_1+a_2+a_3+a_4+a_5$	功 果	$b_1+b_2+b_3+b_4+b_5+r(b_1+b_2+b_3+b_4)+r^2(b_1+b_2+b_3)+r^3(b_1+b_2)+r^4b_1$

故に卒業當時には乙は遙かに甲に優るのであります、かくの如くに一時的の勞力と耐久的の勞力をする事による功果の差は甚しいものでありますから吾人は宜しく實力養成主義の勉強をしなければなりません。

つまり朝三暮四と朝四暮三とを等しいと考へる人間は時刻の何者たるを解せない机上の空論者であります、孔子の言葉に「物に本來あり事に始終あり先後する所を知らずそれ道に近からんか」と云ふのがありますが是れこそ實に千古不滅の金言ではありますまいか、私等の様に物理を習ひ、化學を學ぶものは宜しく殊に此の點に注意して自然現象を研究しその順序を定むる事が必要であります、孔孟の致知格

物を以て天下を治むと云ふものではないでせうか、人生の競走と云ふものは無期限に長く続きますからして吾人は耐久的の効果を修めん事に努力して國家又は社會の爲に盡すべきであります。

趣味に就いて

四、乙 新 井 泰 榮

人生は向上に始つて向上に終るものであります。身を一孤島より起こして歐洲の天地を震撼した大英雄も、一彫刻家の子弟より立つて千歳青史を照した大哲人も向上の道を辿ることによつて其の生は完全になされたのであります。机に向つて筆を走らしてゐる學者も、鋤を手にして田に耕す農夫も、演壇に立つて教へを説く宗教家も、其の眼は皆向上に注がれ、努力は向上に對して盡されて居るのであります。老幼の別なく、貴賤の隔てなく、求むるものは實に向上であります。

然らば其の向上の道や如何？ 私の淺學之を枚擧することは出來ないのであります。けれ共、高尚なる趣味の養成と云ふことも其の方法の一たることを深く信じてゐるのであります。是非才薄學をもかへり見ず敢て僭越の罪を犯した次第であります。

抑人生より趣味なるものを除去せんか、後には何が殘ることでありませう？ 人生は灰の如く冷かになりはしまいか、木枯吹荒ぶ荒野と化しはしまいか、青葉若葉の萌え出で、莖ほ、えむ春の野に立つとも

空高く歌ふ雲雀の聲も何のその、花から花へと舞ふ蝶の姿も何のその、只我慾にのみ頭を腦ます没趣味の人を見給へ。其の生や鳥も歌はず花も笑はず、恰も北極の海に漂ふ氷山の如く、茫莫たる砂漠の中に點々として立つてゐるピラミッドの如きものではあるまいか。

燃ゆるが如き深紅の紅葉、草葉にすたく虫の聲、或は明皎々たる清月に對して魂魄遠く天外に飛ぶの人生に較べるならば、豈霄壤の差のみならんやであります。我々毎日の食物も只胃や腸を満たすのみであるならば必ず日に三度食ふ必要もありません。もつと簡單にした方が複雑な現社會に於ては時間の經濟上却つて好都合かも知れない。けれ共若し其の様であつたならば人生は土を食つて生きて居る蚯蚓に異りなく、世は養豚場と化してしまふかも知れないのであります。苟も萬物の靈長として自ら任じて居る以上は味はねばならぬ。味ふそこに即ち趣味なるものが萌芽するのであります。趣味は暖かいもの美的なものであります。汚れ多き我等が生を美化して行くものは趣味であります。高尚なる趣味であります。よき趣味を味ふことの出來る人をよく生きる人と云つても過言ではありません。

論者は云ふ、趣味は生活の餘裕に依りて存すと。私は之を肯定することは出來ない。勿論物質に流れ黄金萬能を稱へる現社會に於ては一概に否定することは出來ますまいけれ共、趣味は生活の餘裕によつて存するものであるとせば、趣味そのものは何の價值をも持つてゐるものではない。一部人士の專有物となつてしまふのである。が趣味はもつと一般的のものである。貧者の前にも、富者の前にも、凡人の

前にも、英雄の前にも、叩けば其の門は開かれ、求むれば得らるゝものである。白壁めぐる高屋でなくとも、月影もるゝ廂の下でも不可能ではない。吾人は寧ろ不實用な富者の趣味よりも實用的な貧者の趣味を愛するものである。玉樓の物質的趣味よりも破屋の精神的趣味を貴ふものである。千古の神祕を囁やく大自然は吾人を圍繞してゐる。巍々として聳ゆる山岳に、或は滔々と流るゝ河川に、自然の趣味は豊富である。

斯く招けば來る趣味も人生の向上には偉大なる關係を有して居るのであります。先哲は云つた「趣味は人格の反映なり」と。實に然り。野卑なる人は其の趣味も野卑にして、高尚なる人格の人にして初めて高尚なる趣味を味ひ得るのであります。諸君！ 翻つて現今の社會を見給へ。歲月は滔々として流れ世は刻々に變化す。けれ共趣味は腐敗し、道徳は廢弛してゐる。此の大戦亂に所謂成金なるものが澤山に出來た。彼等は普通の料理味ふに足らずとなし、所謂肉山脯林、酒池は以て船を運すべく、糟堤は以て十里を望むべし。てふ贅をつくし、或は單に膝を包み体を被ふを以て足れりとせず、瓊宮瑤臺の中に住み、綾羅錦繡を身に纏ひ、而も特意然としてゐるのであります。是等の徒は徒らに食ひ、徒らに着るのみにして嘗て趣味なるものを解し得ない輩に比すれば或は品位の點に於て幾らか上に在るかも知れないけれ共、高尚なる趣味——即ち書畫や音楽や詩歌や——を持つ人とは到底同日の談でないことは明かでありませう。然も是等の輩が世にはウヨクとしてゐるのである。識者は聲を枯らして彼等の自覺と向

上とを叫んで居るけれ共馬耳東風の感が多いのであります。

噫！此の如き人心の腐敗に基因するか。是邦人の高尚なる趣味性の欠乏、腐敗に在りと私は思ふのであります。趣味性の高下は其の人其の國家に取つて等閑に附することは出來ないのであります。然も皮相なる道徳を説き、野卑なる趣味に走るものゝみ多くして、眞面目に趣味問題を攻究するものとは曉天の星よりも尙少ないのである。思へば實に慨歎に耐へない次第である。斯くては百年黄河の澄むを待つ如く、何時までも理想の清水を掬し得ないであります。吾人は奮闘以て高尚なる趣味の養成に努力すべきではないか、よりよき趣味の養成に盡力すべきではないか。是獨り吾人の幸福を増すに止まらず、大にしては國家社會の幸福である。人々互に高尚なる趣味を養成せば従つて其の人格も高尚になり、腐敗せる社會も救濟されて、やがて古聖の夢みし樂園も築き上げらるゝことは疑ひないと思ふのであります。(完)

恃むるもの

四、乙 新井 泰 榮

蜂には針があり、牛には角がある……………

これ皆護身の利器であつて恃むに足る。世に自ら恃む所のない人こそあはれである。人が社會に雄飛

するには恃む所がなくはならぬ。恃む所とは身を立てる原因である。政治、軍事、商業、藝術などの才能でもよい。何か人より傑出せる才能があれば、初めて社會に濶歩することが出来るのである。

これと云ふ才能のないものは、到底水平線上に頭を出すことは出来ない。たまく職に就いたとしても、これと云ふ長所がないので、いつ免職されるかも知れないとビク／＼しなければならず、又其れが爲め己が家族を充分に養ふことさへ出来ないのである。

人の一生は實に吾々學生時代の勉不勉に定まるものではない、かど僕は想像する。此の際苦痛を忍んで勉めなければ、恃む所を得て、將來社會に濶歩することが出来ない。

吾々が社會に立ち、男一疋として大道を濶歩せんと欲せば、此の青年の血湧き肉躍るの時に各々の長所に勇往邁進するのがこれ恃とするものである。



文 苑



始めて中學生に

寺 生

田舎に生れた少年が彦根へ来て始めて中學生といふものを見た。それは陸上運動會の當日だ。天長節の式をすまして午後四後、校門——今は裏門

になつてゐる——に來た。ほんやり門口に立つてゐると何でも受付の人が運動會が見なければもうしまへるから早く行つて見ろといふ。恐る恐るなかへ入つた。丁度中隊教練、洋服を着た生徒、それが軍隊教練。十歳位な少年にはいかに凛々しくねたましいものであつたらう。このときあゝ中學校へ行きたい中學生になりたいといふ望みが根ざされたのである。その夜少年は川原町を歩んで又

中學生に遇つた、中學生になりたいといふ希望は益々つのるばかり。こんな話もきいた、街路で物賣が面白い話をして客を集めて居るときであつた。話の一節に「私は小學校を半途でやめ中學校へ入つた」少年はこんな人でも中學校を卒業して居るのだな、自分はどうしても中學校へ行かないければならないと固の希望は義務と思ふまでになつて來た。そのとき彼商人が中學校へ入りましたが小使にごすと結んだとき一同がどつと笑つた、少年も豫期を裏きられ思はず笑はざるを得なかつたこんなことを成人した今迄覚えて居る程深く中學生なるものが腦裏に刻まれたのである。

明治四十年三月廿六日午後四時只一人二時間あまり汽車にゆられ彦根の町に着いた十三歳の少年彼の雙肩には重大な責務がある、數年父に頼み母にすがつて中學の門に入るべく今入學試験の難關に臨まんとして居るのである。翌日四十五番といふ札を受取つた、そのとき種々試験を受けるときの注意を細々として下さつたが試験を始めて受けるこの少年には恐ろしいばかりであつた。中學校

の先生といふものは恐ろしい人だ。この際思はぬものがあらうか。その日は体格検査のみ、身長何尺何寸、体重何貫何百匁、視力正、眼疾なし、齶齒下二、脊柱正、体格弱、終り。彼は小學校では体格中、見そこないではないかと思つたが仕方がない、これは駄目。すこゝ室を出ると遠方で誰かが大聲に体格弱のものは明日からの試験を受けに来なくともよいぞと叫んだ、これを聞いたからたまらない、少年は力なげに校門を出た。

終日煩悶。

翌日兎に角登校別に何の音沙汰もない、皆と共に試験室に入つて胸を撫だおろした。

三日にわたる試験もすんで卅一午後一時道場の側に掲げられたる氏名のうちに彼は三字名ですぐ自分の氏名を認めた。

出放題

五甲 椋田眞次郎

(十一月の或る夜)

今日の晝はほんとに暖かゝつた——高い晩秋の

んで片方の乳房を小さい手でさぐつて乳を飲んでる様な心になつて見たい、其の心は屹度汚れない清い心だと思はれるから。

私の心は……女子供が木の影に脊中の人形をおろして、せまい白い胸おしひらひけて、人形を吞ます時の様な心になつて見たい、其の心は屹度淡い家庭の趣味を持つて居るだらうから。私の心は……セッセと勉強に餘念のない其の時の様な心になつて見たい、さうすれば屹度或目的は貫く事が出来るだらうから。

石場が濱に於ける感想

五甲 横 關 虎 三

大正九年八月、大日本武徳端艇競漕大會に我が校にては第一第二選手及び赤鬼俱樂部出漕せしかば、我補缺として上津し、日々朝は七時より夕は六時迄石場が濱の老松の下に座して、炎暑をも意とせず、ストップウオッチと雙眼鏡を手にし眼に血走らせて得たる感想をいさゝか述べん。

空に云ひ難い悲しみは有るけれど——。然し夜になつたらほんとに寒い。殊更に寒い様に思はれる部屋に閉ぢ籠つて火鉢の上にかぶさる様にして暖をとつて居ると妙に「冬」め夜らしい感じがした、硝子戸が風の爲でがた／＼やかましくがたつく。外はまつくらで何一つ見えない、おそろしいくらい夜だ……町に人がひとり通つた、カランコロン、カラン、コロンと下駄の響き……あなんと云ふ陰氣な寒い音だらうふるふるとい程寛い。

今の音が微かになると又一人通る、其してその度毎に陰氣な感じがまして夜も又次第に更けて行く……空虚な部屋の中に電燈がパアツツと照りかへる、目がいたいほど、さみしく……荷車がゴトン／＼と地の底から湧き出る様な音を立て、尙淋しい。

(私の心は)

皐月の雨の淋しく降る夜でした、友のSと二人僕のルームで私の心は……と云事を話合つて見た。私の心は……幼子が母親の暖かい乳房を合

公團第一、我が怨敵米子中學及び本校選手につきてくはしく述べん。

奉公團第一と云ひ、米子といひ、本校と云ひ、苟しくも優勝を見込まれ、衆人の目を引きチームは、必ず皆体力平均したるものにそろひ、殊に奉公團は全部の漕手の体重は十八貫を下らずと。又米子中學は一般に身体細長し。されど筋肉に於て非常に逞ましき者多し。此の點によりて見れば身体大なる者にて揃ひたることは、強弱に非常なる關係を有することと思ふ。唯一二人のみ体大なりども此のチームは必ずしも強しと云ふことを得ず。

萬事敵と互角の位置にある時は、身体の耐久力によるより他には方法なき爲なり。

年齢は可成成年に近き者を選ぶを必要とす。なるとなれば我國の壯丁検査は二十一歳を以て行はる。之れによりて見れば、身体充分に發達し、筋肉最も逞しく、力多き時代は、廿一二歳前後なることを知るを得べし。然るに中學に於ては十八九歳にて卒業年齢なれば、其の内身体稍々發達せる

者は、壯丁検査に最も近き十八九歳の者と云はざるべからず。

又最も強チームと云はる者によりても、此の事實を明瞭に知るを得べし。奉公團第一、米子中學、本校、徳島中學、長濱農學、四日市商業、愛知一中等によりて之を示さん。

奉公團の平均年齢は二十歳前後にして、米子、本校、長濱は十八九歳、愛知、四日市其の他の選手に於ては十七八歳なり。其の内何れが強きかと云へば、奉公團を首位とし、米子、本校に強弱を云ふことを得ず。唯本校は、波荒き時は彼を凌ぐことを得るのみなり。次に來る者は長農、其の次は徳中、四日市、愛知等なり。此れ全く年齢順なり。されば年の長じたる者が、如何に有利なるかを知るを得べし。

練習に於ては奉公團、本校、米子は甚だ猛烈にして、其の他は一段下る様に見ゆ。

奉公團は日々レースコースを引く時は必ず自艇に應援團員分乗し、各ボール毎に止まり居りて、交代に選手のボートを追ひて其の練習を有効なら

勇に富み、元氣に満ちたる者として、衆人の目を引けり。又銅色の甚だしき身体は他に對照物を見ざりし爲平常に於ける練習の猛烈さを忍ばせて敵を驚ろかせたり。

日々の大學艇の練習は、午前、午後各一時間宛のみなれば、之を以て満足せず、餘暇ある毎に尻にはヨヂムチンキを塗り、手には綱帶を巻き、身体の疲労をも意とせず、紺屋ケ關に繋げる自艇に乗り、甚だ元氣にて猛烈に練習せり。

此の苦痛はどうてい筆紙に表はすことを得ず。唯諸君の胸裡に其の様子を思ひ起して下さるより他に道なし。

諸君の此の苦心を察せられて、今一層選手に對して同情と慰安とを與へよ。

意氣込みの盛んなる事も又大切なり。意氣込盛んならざるチームは、必ず敗者の汚名を蒙ることは明らなる事實なり。

本校は体小なる時と雖、一位二位の位置を争ふことを得るは、全く意氣の盛んなる爲と云はざるべからず。

しめ、又選手を勵ます。若し其の日のタイムが長引きし時は、夜に至りて選手を自艇に乗艇せしめ應援團之に猛烈なる應援をなし、人目を避けて盛んに練習せしむ。

米子は大學艇に乗せし時は甚だ熱心に練習す。又其の練習や獯猛にして、時間の利用の上手なること他に比なし。餘暇あればバック臺により練習し、或は三高に或は奉公團にボートを求め、必死となりて練習す。

本校の日常に於ける練習振や實に悲壯なるものにして、湖上猶ほ暗く残月を頭上に頂く頃より、夕は星の點々として空に輝く時まで、枕の如きシートは紅となり身は綿の如く疲るゝまで或は長濱に、或は多景島にと遠漕に出かけ、さもなくば北川迄のコースの上に本校の榮ある歴史を一層輝かさんと猛烈に必死となりて練習せしことは今更余の喋々を待たずとも愛校心に富める諸君は概に承知せらるゝところなり。

大津にても周湖遠漕の疲れをも意とせず、日々甚だ元氣にて眞面目に練習せり。殊に我が校は蠻

長濱農學の初陣なるにも關はらず、立派なる成績を得ることの出來しは、之又意氣の盛んなるに他なし。今少し彼が右に述べし條件を知り、猛練習する時は、必ず本校の好敵となるに至るべし。彼は未恐るべき者なり。

米子と本校との競漕も又全く意氣の戦なりき。彼我を對照するに、練習に於て、元氣に於て、体格に於て、寸分の差なく一致し、全く意氣込の多少によりて勝敗を決したるなり。

本年は、我が校選手は大部分五年級の体大なる生徒によりて編成せられ、従つて年齢に於ても成年近き者多く、爲に選手たるの要件に適合し、其の上一致協力し、愛校心より逆しる熱誠なる猛練習と、深き研究とによりて、近年に無き強チームを編成する事を得たり。

然れども悲しい哉。天我が努力を未だ足らずと思ひてか、榮えある榮冠を遂に米子中學に授けたり。我々の胸中は張り裂くるばかりなり。

今後は優勝てふ榮冠は、すべて体力と年齢の大にして熱心猛烈に、又、研究的に練習せし者の手

に歸するは火を見るより明かなる事實なり。されば、本年度より毎年五年級諸君の体大にして、我こそは我が端艇部否、我が彦根中學校の名聲を雙肩に負ひて立ち、立派なる古き我が校の歴史を輝かさんと思ふ自發的に出でたる愛校の士より選手を編成せられ、大なる意氣、猛烈なる練習により石場が濱に於て怨重なる彼の米子中學をたゞさつふし、優勝の榮譽を得られ、以て我が彦根中學校の名聲を擧げられんことを切望してやます。終りにのぞみ我が彦根中學校の名聲の、益々盛んならんことを祈る。

拙者の標語

五甲 東野太一郎

何くそ元氣。

頑張れ。

必成就大望。

右は拙者の標語でござる、所謂モットーでござる。モットーなんて事を言へば徳川時代なら西戎視る。

て頑張りが無いのは奇怪至極に存するでござる、此モットーを所有すること無い人は宜しく此善モットーを煎じて吞まつしやるが宜しうござる。

必成就大望。此モットーは前述の何くそ元氣頑張れの凝結物でござつて若僧に取り最も大事な最も大切なモットーでござる、一寸此モットーを見れば反逆思想とも見え申すが現今拙者の意見は左に候はず他に仔細のござる、即ち「えらもん」になることとござる、「えらもん」の中にも色々の意味がござるが先づ此處では口を閉ぢ申すでござる、「えらもん」「えらもん」繰返せば繰返す程耳に頭に響く好意でござる、若僧には忘れる事の出来なないモットーでござる、此モットーを解せぬ人は地獄へ行き白髪の五六本もある人でござる、白髪のある原白頭總理大臣東郷大將乃木大將等は「えらもん」でござつて充分此モットーを解してござるされば「解せぬ」と云ふ語の譯は「有せぬ」と意味するのでござる、此モットーを有す人が「えらもん」になるとは云へんのでござる、先づ何くそ元氣頑張れ必成就大望の三大モットーを深く心に銘する

されるぢやろうし又攘夷論も出るぢやろうが、時代が進むと違つたもんでござる。曰く以上は拙者のモットーでござる。是から以上の三つのモットーにつき述べるでござる。

何くそ元氣。此モットーは何人にも必要でござる、人間は年寄ると此モットーが實行され悪くござる、けれども前髪姿の時は充分實行出来るもんでござる。ぢやによつて各々方は只管此のモットーを御呑み込みなされ何事にも何くそ元氣を御出しなさるが宜しゅうござる。

頑張れ。此モットーは何くそ元氣と對稱すると少し上等でござる。何人も何くそ元氣がござつて頑張りが無い其の時は空元氣と言ふものでござる今はいざ知らんでござるがその昔近江商人と申す者は天秤棒一つを何くそ元氣と振り廻し頑張り強く近畿地方は愚か關八州迄も及んだのでござる。その結果今日本國中近江商人を知り申さん人はないのでござる。

左様にござるのに近頃江州人は他國人にくらべ

の必要がござる、銘した上何事にも三大モットーに依つて行つて行くのは尙更必要でござる、拙者は此三大モットーを好物として食つて居るでござる、各々方もたんと御食ひ召されたら甚だ消化が宜しいと存するでござる、拙者は此三大モットーをしきりに御勧め申すでござるでござる。(終り)

悲涙の日

五甲 東野太一郎

大正九年九月二十三日、此日は私に取つて忘れる事の出来ない日である。あの日には太陽は赫々と輝いて居た。

その日の午後には我が彦中野球部否我が彦中は食つても飽かない八商の爲に敗られたのだ、心ある生徒諸君は決して此日の屈辱を忘れる事は出来ないと思ふ。

私は今其の前後を語ろうと思ふ、我校の野球部の全責任を負ふ選手には来る九月廿三日と云ふ八字を深く刻んで居たに違ひない、選手の一ヶ月間の練習の努力は實に多大なもので且つ確に期待す

る所があつた、其の間私は毎日の様にその練習振りを見た。東林先生の激勵の聲藤谷先生の叱咤の聲卒業生諸兄の應援の聲はグウラランドに満ちて居た。

私はもう月桂冠は我校の手にと心密に微笑んだ事も数回ではなかつた、生徒が三人四人集れば野球の話で持ち切りであつた、愈々二十三日は来た此日は来た。

敵は怨重なる八商だ、「何くそ元氣だ彼の八商を打ち斃さずに置くべきか」とは選手は云ふに及ばず生徒一同の腹の奥の奥を尋ねた時出た聲であつた。

應援に來た生徒の數は實に三百人餘を數へた試合の経過は豫期した様に我が校に優勢で應援團は有頂天になつて喜んだ、之に反し敵の應援團の沈黙は見るも哀に感せられた。

觀覽者は立錐の餘地無い迄入り込み彦中へ應援の聲又沸き返るばかりであつた。

四回五回と回数は進んで七回となつた、俄然此時敵は二點と云ふ貴重な點を入れ我が軍と同點に

なつた。

敵の歡喜味方の自重運動場は沸き返へつた天下分け目の戦、緊張又緊張凄慘又凄慘遂に十一回の裏となつた。

太陽はもう西山に沈んで居た、嗚呼此時嗚呼此時もう云ふ元氣もない大切な上に大切な一點は敵の手に。

無殘無殘あはれ無念涙は盡き血の涙、私は此時血の吐く思ひであつた、一同はあまりの殘念さに齒を食ひしぱり互に抱き合つて泣いた。

此時の哀れさ、此の時悲しさ、此の時の無念さ、此時の涙は決して形容出来ないものであつた私はもう是以上の事はどうしても書けない、あまり無念であるから。

私は此處まで齒を食ひしぱりながら書いた、眼の中からはいつの間にか涙が溢れて居た。

嗚呼是れ血と涙の結晶、然も悲涙の結晶であつた。

後進諸君よ銳氣に富む來る年諸君よ、切に〜記し忘る勿れ此屈辱の日を此悲涙の日を。

雪の伊吹へ

五甲 下村喜一

汽車は色々な豫想空想を胸に浮べて快談する雪艇姿の紅顔子に乗せて朝霧の中を容赦なくスピード出して走つて居る。幾つか停車したかと思つて居る間に早伊吹山下の驛に着いてしまつた。暖かいステームを離れていざと列車を捨てプラットに飛び下りた。

雪艇を肩にした僕等は近江長岡！々々と呼ぶボーターの聲を後に聞き流して凍つた經道傳ひに歩き始めた。

俄かに冷たい風が一同の顔を過ぎる。慄然としたる。まるで氷室へでもは入つた様に——と眼醒むるばかりの一面の雪野原が展開された、寒景蕭條味が沁々身にしむ。なつかしい伊吹も麓を見せてゐる。一同の肉は自ら動いて居た、種々な物語りが友から傳へられる毎にポーッ〜と白い呼吸が散る。ザク〜ザク〜ザク〜と薄氷をついて一列になつて歩んで行く皆の靴音が妙に揃つてしまつて

何とはなしに元氣よく足を運んで行く。それでも一寸話が絶えてしまへば何たか肩のスキーが重い様に思れる。

左に折れ右に廻り田圃や林や村落を抜けて目指す伊吹へと歩を急がした。鴉が時々頭上をかすめて向ふへ飛んで行く。灰色の雪空に海拔實に四千尺、湖國の嚴冬を脾脱しつゝ、白皚々の雄姿を雲中に聳立して居るかの伊吹が齶らす所謂伊吹風は實に身を劈く様に感じる。

四十分程経てば春照村の道路上を聊か歩を緩めて歩む僕等が見られるであらう、偉大なる雪の伊吹は彌々接近して來る。巍然たる其姿を仰ぎつゝ猶も進行する。颯と寒風が吹く、それにつれて玉花が繽紛と散つて來る。村を離ればすぐ上野に着く一農家に休息してから登攀するのである。雪が深く積ればスキーを履いて登るのだが、生憎淺いからテクラねばならぬのだ。先づ其家で外套なんぞは剥いでしまひ、ジャケットの儘になり、肩にスキーを手に杖をと言ふ輕快なスタイルになつてしまふのである。

愈々登山だ。冬の朝のその寂寥を味はひながら坂路を一步一步と上るのである。カチン！カチン！杖が石に當る音が静かな山に響く、時々強い風が吹いて来て、枯木や常緑樹に花と咲いた雪を他愛もなくふり落して行く。

延々たる坂路を見上げながら登つて行く、漸く一合目に至る——あたりの景色眺望の奇なるに、朝日の旗が翻つて居るのは殊に勇ましい。汗を拭ひほつと先づ一休みして足を休める。嵐は吹雪を呼んで居るけれ共何しろ猛練習するにはあまりに雪が淺過ぎるから詮方なく勇を鼓して三合目へと向ふた。路は此處より峻しくスキーを肩にしてテクろのは随分辛い、段々と雪は深さを増して来る。二合目を過ぐる頃には馬鹿にスキーが肩を壓して汗はすつぷり流れて居る。休息すれば汗は忽ち収まつて又寒氣肌に透る。零下五度とか言ふ位ひだから……。

登ればすぐ熱くなる。一寒一熱、登るも休むも苦痛である。友は或は接近し、或は相遠ざかつて行く。やつとの事で四望豁然理想のスキー場へ到

着した。見渡せば既に勇敢なるスキー連は時々喊聲を揚げつゝさも決よげに盛んに白金の尾を曳い滑つて居る！赤い血は跳つた！——自分は識らん間にスキーを履いて尺餘の白雪上に立つた。やあ絶景！いざ思ふ存分滑らん！と獨語云ひながらまづ足を馴らしつゝシュツ！シュツ！と心地好い響を立て、傾斜へと近づいて行く。

白雪を蹴つて數町も一瞬間、一滑りに滑走するその時の迅快さ！痛快さ！到底筆詞も及ばない。夢中に滑り廻る——今迄での苦をも忘脚してしまひ……。

轉倒しまいと腕く、遂に全く暖かい域を越えてしまつて實に汗は瀧の様に流れる。素的に愉快である。それと同時に又空腹を覺える事は又素的である。正午近くなれば皆焚火なんかあればそれを圍んで皆バクつくのである。スキーは雪に突き差しておくから、大勢寄つた時は恰も林の様に一異觀を呈する事もある。時には粕汁なんて御馳走もあるけれ共、たとひ一筆の粗食でも實にスキー連中に對しては山海の珍味も同様に感じる。

食終れば忽ち又活動する。見て居ても随分面白い。

噫！實に雲艇は勇壯な運動だ。皆が家で火桶抱へて震へて居る雪の日にもかく雄大な氣分に打たれ大自然のこの靈氣に包まれて汗たら〜、花と散る雪をふみ蹴散らして壯快無比の運動をやるのだ。時には繪の如き伊吹の靈峰は總て白雪に蔽はれた儘沈黙を守つたり又輝く光りを浴びては玲瓏として聳え立つ時宛然白玉の様な壯嚴さを實現する、是の如くに勇壯な嚴冬の一日を送るのである。そしてあらゆる何もかもが唯絶快の二字で盡され

てしまふのであつた。短かき日影は西に没せむとして居る。夕靄は暗澹と四面をこめて居る、鐘聲暮雲の中に迷ふ頃には寒いとも言はで終日の愉快さをさも心地よげに談笑しながら……。

寂しい長岡のプラットフォームに、下りの列車を待ち構へて居る僕等の影が眺められる事であらう。(終)

竹生島の一晝夜

五甲 北村 由藏

「竹生島御參詣の御方は御降りをお願います、小渡しを致します」

さよふならの一言を以て婆さんに永久の別れを告げ、小渡しの舟へと乗り移る。同じく吐き出された人員はと見ると僕とN君の外に例の西國巡り先生と郵便屋と外二人。N君は郵便屋の手に持つてゐる手紙を窺き込み乍ら、

N「おや……」

如何したと問ふと今日寄せて貰ふ様にお寺あてに出して置いた葉書が今此處に在るのだと言ふ。

僕「そして其は何日前に出した？」

N「二三日前」

僕「其は困つたね」

N「如何しやう？」

僕「如何しやうて君、其でも誰やらからの照會狀を持つて来たやろが」

N「持つては来たけど……」

僕「そして君、君は今迄一度か其のお寺へ行つたことがあるのか？」

N「否此の島へも今が始めてや」

僕「おーやおや、君も始めてか、僕は何かも君を信頼して附いて来たのに、あれ蒸氣が彼方へ行つてしまふ、おい大丈夫かい？」

N「まあ大丈夫やろ」

僕「心細いな」

案じ乍らも兎も角上陸。

嵐氣に咽びつゝ石段を上つて行くと左手に寶嚴寺事務所と言ふのがある。

N「こゝだ〜」

とN君は照會状を出して飛び込む、改まりも改まつたり。

N「私は長濱のN——と云ふ者ですが此の名刺の通りの人から照會を得まして御視ひ致しました、どうぞ二三日御厄介に預り度く……」

甘い〜と冷かしてやりたかつたが寶嚴寺の嚴の字が如何にも嚴めしいのに氣合負けして出かつた言葉をあーつと欠にして仕舞つた。交渉が

ふ。大した勢だ。

○之は好うこそ御出で下さいました」

見ると中僧さんが袈をさつと捌いて手をつく。二人へい」

と蒲團を迂り下りる。

僧「此頃住職は留守で御座いますが……むさい所でも御差支へ無くばどうぞ御ゆつくり……」

N「……して何日程御逗留留下さいますか？」

N「一週間程御厄介になり度いのです」

とちよつと僕の方を見て、

N「この人だけは明日歸ると言つてですが」

僕はつるりと顔を撫でた。

「ボー〜」

今頃汽船が如何したのだらうと見てゐると三階造りの大きい団体船が棧橋へ横附になつた。上陸するのを見ると出るは〜丸で蟻の行列だ。袴をはいて居る所などから女學生らしい、喧々轟々百舌の様石段を登つて来る。女學生だ！やつぱり女學生だ、青い袴、赤い袴、鳥居を避けるのも二十人三十人とあつてはあながち家に不幸があつた

成立したと見えてやがて玄關から東向きの八疊敷程の一室に案内された。二つの敷布團に二人がちよこねんと座る。静な部屋だ。障子を開けるとさつき登つて来た石段がすつと下の方に見え、仰いで潜つた石の大鳥居が今はその上の苔の香が嗅げる。大きい何の木だか知らぬが根本から無數の幹を分ち其中の一番長い奴が僕等の前ににゆつと首を延ばして來てゐる。向ふ側は太木が生ひ茂つて晝尙暗い位だ。湖は棧橋の邊丈が眼界に入り波止の此方の灣入には小舟が二艘竝んで居る。

N「好い處やね」

僕「好い處やね」

N「第一静で好い」

僕「此島は日に何邊は汽船が寄る？」

N「そうや、一日に二回か三回位やろ……さあ之から本を讀まう」

開けられた靴の中から出るは〜、楚人冠の大英雄記、盧花の巡禮紀行、春月の何、曰く何曰く何々、其の大部分は中學校の文庫から借つて來たのださうな、逗留中に之を全部讀上げるのだと云

者とも思はれない。

僕「何處の女學校だらう？」

N「京都さ」

僕「如何してわかる？」

N「その言葉で」

僕「言葉の如何いふ所で？」

N「綺麗な所で」

僕「言葉も美しいが又スタイルが何とも云へんね」

N「あれ、彼方へ素敵なハイカラが行きよる」

僕「なる程」

總体に綺麗な女ばかりである。實際京都の人間かも知れん、一廻り山を巡つてどん〜船の方へ流れ歸る、もう石段を下る者も疎になつた頃。

「ボー〜」

さあ大變、遶るは〜轉がる様に走つて降る。前の者に突衝る者後の者に突衝る者、大きいのと小さいのと蝙蝠傘の網渡し揉みつ揉まれつ絶りつ抱きつ〜。

僕「一人位轉倒けさうふものやね」

N「ハ、……」
僕「あれ 未だ悠々と歸つて来る奴がある」

N「ほんに落つたものやね」
人より一町程も遅れて静づく〜と来る二つの赤い袴がある。同じ様に右手を胸の所へ上げてさくり〜。

實に理想的の女學生典型だ。近づくに従つて低い歌ひ聲が聞えて来る。彼等が歌つてゐるのでなく實に自然の音楽が聞えて来るのだ。その聲其の調子、僕は鶯の精かとも疑つた。N君は、

「竹生島劈頭の夢を破りしは美しい女學生團」
と日記帳に書きつける。

やがて船は出た。島は元の静けさ否其以上の寂莫に立ち戻つた。

「お粗末な物ですが」

小僧さんがお膳を運んでさつさと出て行く。

僕「食べ様か？」

N「食べ様」

先づ御膳を調査する、茄子の俎いたのが向ふ側の右でその左が薩摩芋、此方は右が羹碗に左が茶

とある。西國卅番竹生島觀世音の御詠歌だ。僕にはどうも意味がしつかりわからぬ。特別建築物だと云ふ觀音堂を右へ下りて清水の舞臺の様な建物の下を通り一寸した廣場へ出た。左側に社がある。都久夫須摩神社と云ふのが之だらう。右手には五十疊敷程の湖に臨んだ板床の臺がある。土足を禁ずとして御志と云ふ箱が置いてある。N君は一錢獻上して之に上つた。僕は知らぬ顔をして彼に従つた。臺の中央に、三寶の上に素焼の土器が積んである。之を下の湖の中へ投げ込むと厄よけになると云ふ。價僅に二錢是も一つロハで厄よけをしてやらうかと思つたがN君が直ぐ下りて仕舞つたので棄權した。

臺の横に沿うて尙下ると突兀たる岩石が秀を銜ひ峻を誇り巖を驕り儉を慢じてゐる。皆之根を一つにした一枚岩。或は天に嘯き或は水底に奔り、和いでは芒を遊ばし、怒つては波浪を咬む。僕等は縫れた岩と岩との間を縫うて程好い所に腰をすえた。先づ望む故郷の空。

嬉しさは心にかゝる雲もなき

碗四つの容器を對角に結ぶ交點の所に漬物を載せた小さい皿、僕は羹碗の蓋をそつと取つて見た。汁の真中に白い丸い物が浮いてある、卵かしら？箸の先でちよつとつゝ、ぬるとする。箸を横から突込んで持ち上げ様とする。ぬるり〜と逃げる。今度は二本共その真中へ突さして左右へぐつと折く、引離された二つは巴をなして碗の中をふらふら浮遊する。氣持の悪い事夥しい。汁だけ吸つてす早く蓋をびらん！

芋と云ひ茄子と云ひ鹽からかつたり水臭かつたり。N君の手前いや〜飲み込む。眼を閉ぢてはぐつ、暫くしてはぐつ。

僕「是から參詣に行つて來う」

N「行かう」

眞直に辨財天の方へは登らずに右の觀音堂の方へ行く、左側に繪葉書を賣る所がある。N君が十枚入り廿錢のを一つと切手とを買ふ。繪葉書の袋の表に、

月も日もなみ間に浮ぶ竹生島

ふねにたからを積むこゝろして

故郷の空をうつとりと見る

第三者の地位として此處から波止場や向ふの絶壁が見える。殘に嬉しいのは僕等の部屋が其實物は梢に隠れて居乍ら水の底に全体の影が現はれてゐるとだ。

N君早速寫生帳を出して鉛筆書をやり出した。

僕「やあ、もう山を一周廻つて來ましたよ」

頭の上の岩上さつきの西國巡りが突立つた。先生何處から降りやうかと躊躇して居たが少し低い岩間を見つげ一時に手足を働かしてひらりと飛んだ。途端に大きい饅頭笠がごろん。

四「寫生ですか！」

窺き込まれてN君は早い處でさり上げ、

N「貴方を寫生さして下さいませんか？」

四「え、どうぞ」

N「一寸帽子を冠つて見て下さい」

此處ら全く寫真屋の聲色だ。

四「斯うですか」

こそばい顔をして眼を彼方へやつたり此方へやつたり出來上つたのを見て黄色い齒を出して只に

たり。

僕「貴方なんか方々廻つて居る間には随分景色の
好い所も見たでせうな」

四「然うです、此處などはまあ餘程好い方です
が今迄で一番好かつたのは四國の屋島です
な」

僕「は、あ屋島、彼地はテーブルの様子上が平坦
な地は無いですか？」

四「然うです、併し灣入がありましてね」

灣入の一言で以て屋島の勝が目前に髣髴する。

僕は今後竹生島の絶景を人に誇る時はその縁と斷
崖とを以てしやうと考へた。

N「斯うして信心をなさると何か好い事がありま
すか？」

四「あるです」

僕「どんな事が？」

四「然うですな、まあ斯うして知らぬ旅に出まし
ても乞食をせずとも毎日々々の食事にはどう
にか斯うにか不自由なしに行けますし……」

何か云つてゐるには違ひ無いが話が實のるに従つ

て波止場へ散歩に出かけた。無言湖を見つめる事
暫しN君は戯に下駄を脱いで、

N「先立つ不孝の身を御許し下さい」

と兩手を合して蹲つた。あはれ寂しき影よ、N
君は遂に斯うして死ぬ人では無からうか？あの淋
しい眉、あの悲しげな眼、ちつと物を見つめる癖
のあるあの瞳！

僕「將來君が死んだと風の便りに聞いた時僕は今
君が斯うしたことを思ひ出さう」

僕は何時に無くしみくくと斯ういふ言葉が出た
僕はN君を悲しい影だと呼び、N君は僕を淋しい
友だと云ふ。友か自然かあゝ淋しい夕悲しい湖、
是皆美しい景色の生む夢の場面。

湖に我恨あり秋の暮

夕飯時と戻つた僕等の眼には又一つの痛ましい
影が寫つた、馴れた石段を手桶下げてしどくく降
りる僧一人、おゝ君が御名は刈萱と呼び給はずや
？明かしてたべ……

○「どうぞ御風呂へ……」
小僧さんが呼びに来て呉れた。

て御國言葉が出るので此方には段々と分らぬ様に
なつて来る。

N「貴方の旅に出なさつた動機は？」

彼は少し否な顔をした。

四「なかに別には是と云ふ程の事も無いんですが、
……」

と話を濁す、少々面食つたらしい。

此處で西國巡りと別れて部屋へ戻る途中で、

N「彼奴は何か悪い病氣があるに違ひない」
は振つてゐる。

つうか……と話し乍ら歸つたので日本でも三

つと云はれる辨財天を拜して来るのを忘れてゐた

N君が晝寝をしてゐる間に復出直して行つた。寶

物も拜觀して來たがそう大した物もない。早々に
して引かへした。

やがて中僧さんが來て上間へ案内しやうと云ふ

早速本や袴や靴をひと丸めにして手輕な宿替だ、

此度の座敷は一軒棟を異にしたより多く静なより
多く居心地の好い所だ。

兎角して居る間に暮色を催して來たので二人し

二人「有難う」

臺所とも言ふべき大廣間に居るはく中僧小僧
下男總て十人餘り、將基をやつてゐる者も有れ
ば、基をうつてゐる者もある。僕等にこそ寺の夕
は淋しけれ、彼等にとつては是が一番賑かであ
一番楽しい時である。一日の勞をすつかり流して
部屋に歸ると中僧さんが床を敷きに来て呉れた僕
は本を讀み乍ら寝る。N君は寝乍ら本を讀んでゐ
る。夜はしん／＼と更けて寒氣肩に迫り、外は雨
さへ降つて萬籟囁く、手の本が握らうとしては
り、とり直しては手を離れる頃、僕はもう現と云
ふ境を去つてゐた。

x x x x x

と見る一人の白着物を着た人が僕の前に座つて
ゐる。僕は立つてゐる。立つてゐる僕と座つてゐ
る彼と同じ位の高さだ。邊りは薄暗く行燈の火が
一つ浮いてゐる。

彼「由藏」

彼は無言の如くに言つた。然うだ兄だ。十五年の
昔に肺で死んだ兄に違ない。僕は急に三つか四つ

の子供の心に立歸つて指を口々にくはえ乍ら答へた。

僕「おーん？」

兄「何か好い物をやるか？」

僕「おーん」

兄「ではお母さんに貰てござい」

ふつと行灯の火は掻き消されて眼に残る物は暗のみだ。眼蓋はばつちりと開いて低い乍らも己の動氣が聞える。N君はすやく／＼眠つてゐる。淋しい、人が戀しい、笑ふ家が戀しい。

日頃宗教を信じない僕も一度この哀寂のどん底にさまよへば何か偉大な愛護者の腕に縋りたい様な氣が起つた。自分の心一つで自分を制するとは今の僕としては不可能の事となつた。僕は勃然として佛者クリストの教が慕はしくなつた。世に堂々たる智識階級が法の爲に其の一身をさへげりる心状態を今識つた。僕が忌みきらつて居たのは聖者その者で無く其を看板として愚人を惑はし私利を貪つてゐる坊主僧侶だつたのだ。人が幽靈を説けば之を一言のもとに笑殺し人の

そしてすゝと立つた。そしてそろ／＼と障子の方へ近よつた。

西洋物語のゆかしき音楽にひかされて行く少女の様な足ざりで……。

「かたん」

ゆつくり開けた筈の障子の音だ、冬の様な空氣がすゝと入つて思はず顔を反ける。途端にN君の身体がむつくり動いた様だ。外は小雨が降つてゐるらしい、空には星一つ見えず暗は二三間先迄迫つてゐる。まだ夜明け迄には大分間があらう。

趣味といふ細き野路をたどりきて

こゝにもしほる 袂のつゆ哉

此の時にはもう僕の心は平和だつた。たのしかつた。悲しみを聖者に縋るのも一方法なら聖者の常に友とした大自然を友とするも亦良策ではないか。僕の性格として現代の宗教界の状況として僕は宗教を信するよりも趣味によつて生きる方が適當だらうと考へた。宗教と趣味、其の間に如何なる關係があるかは知らない。

人に君の宗旨はと問はれたらば僕は第一に無宗

怪談を聞いては之を一笑に附してゐた僕も墓場等の暗い所へ行けばやはり恐ろしい、死人を見れば

身体がぶる／＼震ふ。是は膽力がそなはらぬからだ。膽力のそなはらぬのは心に悟りが無いのによる。自分の心は悟りが無い者は悟を開いた人の教を受けねばならぬ。悟りを開いた人とは誰？佛者クリストが之である。僕は當然宗教を信すべき人間だ。扱何教を信じやう？斯うなるとまた迷はざるを得ない。現今の青年男女に最も適切な教育と教導法を持つた宗教は何？又果してそんな宗教が存在してゐるだらうか？孔子は教へむとする心があつたが習はむとする者が無かつた。僕は習はむとする心があるが教へる者が無い。折角築きかけた心の石もこゝに於てがら／＼と崩れて仕舞つたこの時である！此時である！

夜は冷えて蟋蟀鳴くや石の下

とふと口に出た。僕はもう一度口ずさんで見た

「夜は冷えて蟋蟀鳴くや石の下」と

自分の句か人の句かわからんが成程蟋蟀の聲が聞えて来る。僕は知らず／＼蒲團の上に座つた。

教と答へやう、第二に生意氣か知らぬが趣味に生きると――。

夜の冷氣に當つて風邪をひいてはつまらぬと又蒲團にもぐり込む、ランプに火をつけて寝乍らN君の顔を見て居ると何だか心の苦痛を隠してゐる様に見える。然うかと思ふと又夢二式の顔の様にも見える。

「ブツ」

おや、N君が尻をひつたのだ、昨日から何だか腹の具合が悪いと言つて居たがどう／＼栓を抜いたな。

僕「クヌツ」

笑つて見たが甚だ張合がない、N君はすました顔をして眠つてゐる。逃げもせず手むかひもせん者は殺すのが出来ぬと云ふが實際眠つてゐる者は仕末に負へぬ。

N「北村君！」

暫くまごろむ中にN君が聲をかけた。

僕「おーい」

首をちつとしたまゝ返事する。

N「起きたか！」
障子の方から聲が聞える。

僕「おーん」

N「月が出たよ」

僕「何？月が？」

僕はバネ仕かけの様にはね起きた。寝まきのまゝ歌申上ぐる蛙の形よろしく敷居に手をつけて空を仰ぐ。朧月だ。孤島の月とか何とか云ふ題で一首浮びさうな所を、

N「君、風邪をひくと悪い、着物を着て御座い」

見るとN君は毛布で身体をぐるぐる巻きにして白い息を吐いてゐる。しぶく身を退いて寝まきを着替る。帯もせず出様として眼鏡をかけてゐなかつたことを急に思ひ出した。取つて返して一人前の人間になり再びN君と並んだ時さつきの空とは似もやらぬ雨後の齋月住みなれし雲井に遊ぶ兎すら降りては波を渡るかと競ふばかり。

N「好い月やね」

僕「この木の間から見る所など何とも言へぬね」
何とも云へぬ、然り何とも云へぬのだ。花を見

やうと言つたが寒いといふので止めにした。やがて夜が明けるのだらう、空が少しづつ明るうなつて行く。ぼつ／＼消える星もある。月が屋根の上に隠れた時僕とN君とは寝ながら次の様な問答をしてゐた。

僕「淋しい所やね」

N「ふん」

僕「僕が歸ると君、今晚から一人で此處で寝んならぬね」

N「隣の部屋で誰か寝て呉れるやろ」

僕「そんなことがあるやろか」

N「でも昨晚隣りで咳する聲が聞えてゐたも」

僕「昨晚？」

僕は知らなかつたが是でN君も昨晚よくは寝なかつたことを悟つた。

僕「君夜中に起きたことがあるの？」

N「え、暫く」

僕「それでは君、『昨晚尻をこいたことを覚えてゐる？』

N「僕が？」

て何とも云へぬと云ひ、月を見て何とも云へぬと云ひ、雪を見て何とも云へぬと云ふ。實際何とも云へぬのだから何とも云へぬと云ふより外に何とも云へんではないか。

流石に蟲は落ちついたものである。月が出やうが出来まいが終止同じ調子で鳴てゐる。僕は是で無ければならぬと思つた。秋の蟲が月と相離るべからざる物として竝び歌はれてゐるのもこの精神からだと考へた。

大樹茂る孤島の月や蟲の聲

元は只有りのまゝ、

今宵この月を仰いで泣く人は

われと想を同じうつらむ

之は何時か夏の夜に私の月を想像してものしたのだが一寸氣に入つたので覚えてゐて今此の景色に當てはめて見たのだ。適切ではないが何だか涙ぐましい氣もちになる感があるのを覺えた。

空ばかり眺めて居て今迄氣がつか無かつたが左手の方の石段が月先を浴びてぼんやり浮び波止場の方が夢の様に仄に見えてゐる。岸邊迄行つて見

僕「やつぱり知らなんだのか」

N「ほんと？其は醜体やつたね」

僕「ハ、、、……」

N「ハ、、、……」

僕「君は長男か次男か！」

N「六男(?)や」

僕「六男？それで兄貴が皆健全か？」

N「否二人(?)しか残つてゐぬの」

僕「姉妹は？」

N「二人」

僕「君の志望は？」

實際國勢調査以上だ。

N「僕は何だか日本の國では死ねぬ運命を持つてゐる様な氣がある。人の居らぬ南洋へでも行きたいの、そして君は！」

僕「僕が、僕は學校を出たら丁稚やハ、、、……」

N「おや障子が明るうなつた、もう起きやうか？」

僕「オーライ」

僕はこんな早く斯處にあつさり起きた事がない。齒磨を持つて昨日西國巡りと話をした岩の

所へ顔を洗ひに行つた。

有明の 一島寒し霧の朝
一間先は千尋の湖定めし氷の様な水だらうと思
つたが手をつけて見ると餘り冷たくも無い。

齒磨を石にこぼすや秋の朝

N「君、城山が見えるね」

僕「何處に？」

N「其れ此の見當に、あの木の茂みの様になつる所」

僕「あゝあれに違ひない、多景島の位置から考へて見てもね、長濱はまた大分はつきり見える」

N「西江州の方が震氣樓の様になつてゐる」

僕「あのすゝと平かな所が饗庭野やろう」

低く鋭いのは安曇川岬、丸く髻髷たるは沖の嶋

霧霧漸く色を失ふ頃波水颯と日光を浴びて遠近の

巒山やをら頭を擡る中嶺然東西相呼應して屹立し

たるは伊吹ヶ高峯に比良の嶮。

眺望の眼の覺める様に壯大なのに反して穩健に

して情趣に富むのは島自身の景である。青い色眼

鏡を透して見た様な緑の梢と苔蒸す斷嵐の實物と

相手は軽く頭を下げてにつこりした。

孤島超然と住んで余りの淋しさに

しづきこりにも會釋してけり

部屋へ歸るとN君何か繪葉書に認め出した。窺

かうとすると見て呉れるなど云ふ。唯々諾々と二

三尺遠慮してゐるがN君が便所に起つた暇に一寸

失敬すると綺麗な字で「島は靜寂その物の様だ」と

か何とか書いてある。

簡單明瞭云はゞ蘆花式の文章だ。戻る氣配がしたので遑て、元の位置にかへしそ知らぬ顔して本を讀む。

N君は今度は寫生帳を開けて釣鐘堂を書き出した

僕「僕は横から首を伸ばして色々の側口を云ふ。

僕「鐘の恰好が悪いね」

N君ちよつと頭をかき上げてゴムでこしこし消す

僕「何だか廂の具合が變や」

又一も二も無くこしこし、おや少々面白うなつて来た、一ぱん全体を消さしてやらうと

僕「全体の形がどうも實物と大分違ふ様だね」

今度はN君暫く考へたが君等が何知つてとばか

虚像！島田にゆつた日本婦人の頭の様な其のなまめかしさのみづ／＼しさ而してその靜けさ。

諸君試に考へて見給へ、野球を見てゐるのが面白いか實地ゲームをやつて居るのが興味か深いか

？勿論その時の境遇心理状態にもよるが夏の靜かな夜などに海岸を逍遙するの愉快は遂に大勢の友人と共にわつと騒ぐ快樂には及ばないものである

向ふ河岸の女が如何に美しいと云つても手に取る花には優りますまい。此の點に於て僕は此の島自身

の景を愛する者である。併し後者が一時的であるのに反して前者は永久的である。即ち一歩退いて

考へて見ると情趣ある其自身の美と壯大なる背景

の勝との共有者たる此の竹生島は一時的永久的の

快樂の長所を遺憾無く掴み得てゐるものと云ふべきである。

N「もう歸らう」

二人は無言のまゝ歩み出した。何の木か芳しい

花の香に咽び乍ら石段の所迄戻つて來ると一人の

黒い着物を着た木挽に摺れちがつた。

N「お早よう」

僕「君！君に僕の顔が書けるか？」

N「書けるとも」

僕「そして其が僕の顔に見る様に？」

N「勿論の事」

僕「では一つやつて見て呉れぬか、見事出來上つたら僕は君の畫才を認るは」

N「よし來た」

僕は座らされた、始めは輪廓、少し書いては大

きい眼をくりつと上げちよと見つめて又畫く、僕

は少して来て来た、畫かして置いて話しかけた。

僕「君の頭は大いね」

N「うんいかい？」

と鉛筆を舐る、額の兩側が少し禿げかゝつてゐる様に見える。

僕「もう書けたか？」

N「否まだ眼や」

僕「もう書けたか？」

N「否もう少し」

僕「もう書けたか？」

N「否もう少し」

僕「もう書けたか？」

N「否もう少し」

僕「もう書けたか？」

N「否もう少し」

僕「もう書けたか？」

N「否もう少し」

僕「もう書けたか？」

N「否もう少し」

僕「どの位書けたか一寸見せて」
 書は人の顔が一番難しいと聞いて居たから多分物にはなるまいと安心してゐたのが、眼鏡から眉毛のあたりなどお恥かしい程僕に好く似て居る「書けまい」書いて見せる」と云ふ行が、り上僕は是ではならぬとN君が書き損ふ様書き損ふ様に少しづつ、動き出した、向ふには氣がつかぬのだ。

僕「書けたか？」
 N「否もうぢき書ける」

と言ひ乍らもゴムが手を離れない。

僕「如何や、書けたか？」

N「不可、やり直し」

「め〜、何邊でも来いとうんどそり返る。目を書く、始めは小さい目を開いてゐる。次に首を上げた時には思ひ切り大きく目を見張つてゐる。

N「書けぬ」

書けないで好いのだ之がうまく書けたら實際日本一だ、N君とう〜焦れ出した。終には僕の方を見ずに自轉車なら手ばなしと言ふ格で寫生帳と睨みつこしてゐる。

天橋行脚と洒落ぬ。

午後二時十一分宮津行き第三橋立丸はこの港(海舞鶴)を發しぬ。同行數十人、其の内の多くは學生にして、他に順禮親子一組夫婦連れ二組工女らしきもの數人なりき。海は可なり濺れて、婦人の多くは其の青白き顔を、甲板上に横へたり。予は船頭に立ちて大海の自然を愛でつゝ、音に名高き宮津埠頭を待つ。左右は皆削り成されし絶壁千尋、老松さかしまに生じ根を寸土に托して落ちず。怪石は累々として重卵の危きをなし、さかまく怒濤は岩に激して雪を噴き、亂岩危礁争ひて來る。忽ち兩山相合する如くにて即ち豁、絶壁危岩従ひて去る。今や船は舞鶴灣を離れ日本海上に乗り出したるなり。雄島雌島の墨繪の如く波上に漂ふの外、水天渺として一物なく、風愈生じ波益怒る。一波打ち越えれば一波更に大きく、船はさかだちて直ちに九天直下、奈落の底に落つるかとも疑はれ船の動搖云はぬばかりなりき。かくあること三四十分、海波漸く静まり松字の一角まさに見え初めて、予等も亦蘇生の思ひをなす。埠頭近

N「不思議や、まあ是で辛捧して置いて呉れぬか何處やら似てゐるね」
 僕「どうやら似て居ると云ふ氣がせんでもないね」

氣の毒に！僕は二つ三つ歌を作つて何れでも氣に入つたのを其處へ書添へへて呉れと差し出した。

あこがれの淋しき孤島に只二人

明せし一夜なごかわすれむ

天橋行脚

四甲瀧本賢腫

私は天橋の産人であり、そこで自慢として古めかしうはありますが日本三景の一天の橋立の遊覽記事が大正八年暑中休暇の日記のまゝに掲載さして頂くことにいたしました。どうぞ一笑な。

この二三日は朝に夕につれなくしてなすこともなく數日を過ぎぬ。八月二十一日朝つ方の事なり。何心なく海面を眺めあたりしに、ふと天橋遊覽を思ひ立ちぬ。身はもとより行雲流水、草鞋脚絆の支度もそこそこに、午後一時を待ち兼ねて早くも

く進めば天橋樓の三層高く聳え、文殊行きの小蒸氣黒煙を漲らして右往左往するなど先づ目に入る船のスローとなりとなりより十五分間、午後四時二十分無事着。驛のほりには文殊行きの乗合馬車自動車など、驛内より出で來る人々を待ちぐるみつゝあり。町は我が彦根町に比すれば戸數小なく人口從て少きも、店頭の裝飾街路清潔の行届きたる、名勝の都邑として誠に好まじきことにこそ。

此の地の産物は主として海産物にして、海老入り松露するめの男波女波魚介のかんづめ貝細工のつま楊子入れ花模様入りのあこや貝等あり。海濱の土産として可なるものと云ふべきか。

時まさに五時になんなんとせり。即ち道を老翁に問ひて町の東端なる智源禪林に今宵一夜をからんとして歩を進む、今や天台笠を右手に袈裟行李を左手にとり、恐る恐る赤き山門に入らんとする頃、暮色次第に立ちこめて寺内の電燈仄かに閃めく。予玄關口に立ちて「頼まう頼まう」と連發すれば、頭髮長く灰色の衣服を纏へる一見半俗半僧の